

毛利神社にあった狛犬のこと

林 寅 喜

(会員)

註 創建 昭和三年(一九二八)十一月

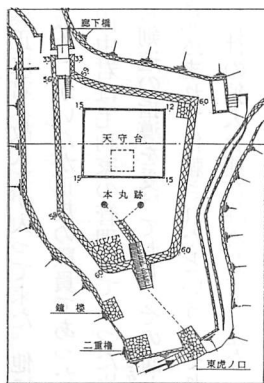
祭祀 佐伯町と毛利家関係者の協力による

祭神 藩祖高政 六代高慶 八代高標 十一代高泰

祭礼 毎年十月十七日

狛犬 毛利 高棟
寄進者 毛利富士子
黒田 久子
近衛 千代子
近衛 泰子
筑波喜代子

昭和二十年(一九四五)四月二十六日馬場の山手(旧電報電話局前)にあった防空壕に、米軍機が落とした焼夷弾が命中し、避難していた三十三名が爆死するという痛ましい事件があった。続く二発目は佐伯中学の本館を、三発目は城山山頂の毛利神社(註)を直撃して爆破、社前にあった狛犬は爆風により倒壊していた。



毛利神社跡
本丸の天主台上に神社
が建てられていた

鳥居 登山道登り口(三の丸入り口)

これは後年隣接の谷川に砂防の小堰堤設置工事の際、重機が接触して損傷し修築したもの
参 考 大分合同新聞連載『城山』46

以下、右のうちから狛犬を運び降ろした経緯について
記憶をもとに記述した。

戦後二十四年の春、私は佐伯市臨時職員として土木課に勤務しており、少し遅れて田中鉄一君(福知山市在住)

と、佐藤正之君（故人）が入って来た。他に一人米沢徳次郎君（故人）がいたが正規の職員であった。

当時田中君は毛利家の管理人であった片岡丈吉氏（故人）から剣道の指導を受けており、その誼と二十代という若さを見込まれて依頼されたという。それは城山にあった毛利神社の狛犬を運び降ろして貰えないか、礼金は二千円でお願したい、ということであった。

しかし、田中君にも降ろす手立てに名案はなく返答しかねていたという。尤も公務員の規律も左程厳しくなかったその頃、二人とも臨時雇いということから、休日はいく一緒にあってアルバイトに精出しており、出勤も作業衣に地下足袋・巻き脚絆という出で立ちであったから、一般の土工と何ら変わることはなかった。

職員も同様初任給も三千五百円前後と低く、衣服は切符制で良質の生地など入手出来ず、背広姿は少なく身なりも良くなかった。したがって、履物も草履や下駄履きで出勤していた人もあった。

この話が田中君から伝えられたのは少し後で、秋の深まった頃ではなかったかと思う。当時私は実家から凡そ

五キの道程を自転車通勤しており、同じ集落の農家に小さなキンマ（櫃）が掛けてあるのを見ていたので、これを使えば簡単に降ろせると話したら賛成して引き受けることにし、早速受諾の旨を片岡氏に伝えて貰い、日時を決めて準備に取りかかった。

キンマは長さ一メートル前後であったが、堅木で拵えてあるため七〜八kgはあったと思う。これを担いで自転車に乗り、五キの砂利道を運ぶのには苦勞したと記憶している。あとは梶棒と取替えの栈木を十本程度、ほかにはモッコ棒やロープなど準備すればよく、それ等は田中・佐藤両君に任せ、米沢君にも加わって貰った。

当日（日曜日）は片岡氏立会いのもと、推定六〜七〇kgはあろうかという狛犬を、田中君と佐藤君が差して担いで一段宛慎重に運び、左右を私と米沢君が助勢して登山道の詰め（矢印）まで運んだが、途中で雌雄どっちか一台座の角が階段に当たり、少し欠かしてしまった。これを傍らで見ていた片岡氏は「仕方ありませんよ」と言ってくれたのを今も覚えている。

それから後のキンマでは梶棒に一人、後ろからプレー

キ役のロープ持ちが一人、棧木の繰り替えに二人掛かりで二ノ丸まで降ろした後、片岡家のリヤカーを借りて邸宅まで運び、昼迄に一体午後一体と三時頃には終わり、あと同家でお茶をご馳走になった。その時片岡氏が「私はあなた方が引き受けてくれたのは良いが、どんな方法で運び降ろすか興味津々でした。それがキンマを使うとは考えても見ませんでしたよ」と言って約束通り札金二千元を頂戴した。借りたキンマは再び持ち帰って返却したの
は言うまでもない。



神明社の狛犬

その後年数が経って片岡氏も亡くなり、邸宅も人手に渡ってから以後、私が史談会に入会して間もない平成の初め頃であったか、通りかかりにふと思いついて立ち寄り、狛犬の行方について尋ねてみたが、「片岡さんが在世中に処分したと思います」という返事で、実物は存在しなかつた。



神明社の狛犬
→印が、記憶の傷跡

そこで気懸かりにもなったので行き先を探って見ることにしたが、毛利家一族寄進の狛犬だけに、外へ持ち出すことなどないと考え、住吉神社と神明社の二社に絞って調べたところ、住吉神社のは大ききから見て関係ないと判断、神明社のは台座に雌雄とも傷跡が見られ、殊に雄に

付いた二カ所のうち、小さい方が記憶の傷と結びついた。

そこで当時内町区長の藤田衣料品店主に聞いて見たが、記録はないとのことであった。しかし、私の脳裏には神明社の狛犬こそが二十四年の秋半ば、四人の若者によって城山山頂から運び降ろしたあの狛犬に間違いないと信じている。

註 この記録は平成初年に書き留めていたものを、加筆・添削したものです。



※知っているようで知らない小さな郷土史
また、そんなことがあったのかと、初めて知る話
まで含めて二十八話。一口話として分かり易く
纏めました。

ご希望の方は、二二一六三五八まで